

# 意見陳述書

2017年3月30日  
松下 照 幸

冒頭に、私自身の簡単な紹介をさせていただきます。私は美浜原発から南方向へ、直線距離にして約15kmの所に住んでおります。地域の方からの支援をいただき、議員として、地域経済の活性化、原子力発電所の安全について取り組んで参りました。美浜に住み、美浜のために働いてきた者として、また、美浜原発の事故を間近で見てきた者として、美浜原発に対する思いを述べたいと思います。

## 1 原子力発電の幻想

美浜町に原子力発電所が建設されることを知ったのは、私が高校生の頃でした。「電気がタダのように安くなる。」「道路」ができ、「学校」や「公民館」が建つと聞かされました。当時の若い役場職員は、関電職員から肩をたたかれ、「皆さんは高給取りになりますよ。」とささやかれたそうです。

ところが、発電所が運転を始めると、道路は、事故時の避難道路に位置づけられ、学校や公民館は、事故時の避難場所となりました。当時の私たちには、原子力発電所の負の側面など知る由もありませんでした。

原子力発電所が運転を始めると、発電所に勤める若い関電職員が、舞鶴市の病院で白血病と認定され、大阪の関電病院で亡くなりました。私の近くに住む若者です。「なぜ、関電病院なのか」、「これって、白血病のデータを消そうとしているのではないか」との思いが浮かびました。ようやく私は、原子力発電所への疑問を感じるようになりました。

## 2 相次ぐ事故、トラブル

運転を開始して早々に、美浜1号機が燃料棒折損事故を起こしました。事故は隠されました。炉心内の事故であるだけに、「その影響は計り知れない」と判断され、隠蔽したのでしょう。

1991年には美浜2号機事故が起きました。「インコネル600という材料は粘っこいので、ポキッと折れることはあり得ない。」と言われてきた蒸気発生器細管が、ギロチン破断を起こしました。「ECCSが作動する事故など、起こると考えてもらっては困る。」と、当時の専門家から言われていましたが、美浜2号機ではECCSが作動しました。「規格値以下のECCSポンプ設置」、「主蒸気隔離弁が閉まらない!」「加圧器逃がし弁が開かない!」「事故初期の炉心状況がコンピューターに記録できない!」などのお粗末さも露呈

しました。驚くべき運転レベルです。

2004年には、美浜3号機が事故を起こしました。11人の死傷者を出す悲惨な事故です。破断した配管は、重要な部位でありながら、運転開始以降、一度も点検されていませんでした。当年8月11日の福井新聞には、「関電、認識後も9ヶ月放置」と一面トップで報道されました。

関電の下請け会社が、事故前年11月にこうした事実に関電に報告していました。その時点で美浜3号機を速やかに停止し、当該配管を取り替えるべきでした。当時私は議員をしていましたので、公の場で美浜発電所次長にこの件を問いただしますと、「全くの誤報だ。訴えることを考えている。」旨の返答がありました。その後、関電は福井新聞を訴えることはありませんでした。

「関電は未点検情報を知らされていながら、すぐに止めて点検せず、次期定期検査で対応しようとした。」これが私の推測です。そうすると事故の責任は明確になり、関電の責任者は刑事罰を受けることとなります。しかし、この点がうやむやにされ、美浜3号機事故において、実質的責任を誰も負うことがありませんでした。

事故は午後3時22分に起きました。作業員は3時の休憩を終えて、現場に向かい始めていました。その目前で起きた事故でした。報道では、当日200名を超える作業員が働いており、もう少し配管破断時刻がずれていたら、100名を超える死傷者が出たでしょう。そういう意味では、関電にとって「救われた事故」であったと言えるかもしれません。そしてそのわずか7年後に、福島原発事故が起きました。事故の悲惨さは、町民の心を激しく揺さぶりました。私自身は、ショックで、半年間、文章を書けない状況が続きました。

美浜町民の大きな不安は、「原発は地震に耐えられるのか」です。先に記した事故は、地震を伴わない平常時の事故です。原発直近で大きな地震動が来て、原子力発電所を激しく揺らしたらどうなるか。岩盤に固定された原子力発電所は、短周期の地震波に良く揺れるように造られており、短周期地震動に弱いのです。直近の地震は極めて強い短周期地震動をもたらすため、原発はひとたまりもなく破壊され、炉心溶融事故を起こすでしょう。

原子力発電所の基準地震動の計算にだけ使われている現行の式は、「過小評価」になっており、地震調査研究推進本部（本部長：文部科学大臣）が全国地震動予測地図の評価に使っている式を用いるべきことも、指摘されています。「地震が来たら終わりや！」という美浜町民の反応は、「専門家」と呼ばれる人たちよりもずっと現実的であると思います。

### 3 半島の先端部に建つ美浜原発

美浜原発は、半島の先端部に位置しています。敦賀半島周辺に集中する活断

層が動けば、急峻で狭い半島部の商用電源が喪失する危険性があります。道路が崩れ、橋が破壊されれば、原発は孤立します。大量の放射能が放出される環境下で、そこに作業員を投入することができるのか。福島原発は平野部に位置し、東西方向と南北方向の道路がありましたが、美浜原発の場合は、半島先端部では道路が1本に限られるため、交通アクセスの回復に困難を極めるでしょう。

半島先端部には、平野部が少なく、福島第一原発のように放射性汚染水を大量に溜（ため）置くスペースがなく、美浜原発では海に垂れ流すしかできません。日本海沿岸諸国に、甚大な影響を及ぼします。韓国、北朝鮮、ロシア、中国も、巨額の賠償金を日本に請求するでしょう。こうなった時には、「責任の取り方」などありません。

日本列島は偏西風の影響を強く受けます。美浜原発が大きな事故を起こすと、放射能は列島中央部の山脈に当たり、拡散し、関西、東海、関東、東北、北陸方面へ流れ、広大な汚染をもたらします。敦賀半島からの「風船飛ばし」が、そのことを示しています。

#### 4 避難計画

現行の避難計画では、高齢者、要介護者、入院患者の方たちの多くは、避難することはできないでしょう。高齢者や要介護者を抱える家族の多くは、子供達の避難を優先し、高齢者の避難を後回しにするでしょう。事故時に、家族が揃っているかどうかさえ分かりません。

避難を支援する医師、看護師、介護施設職員、行政職員、警察官、移動用バス運転手などの確保ができるか。避難受け入れ先で、受け入れ準備を整えられるか。避難支援者の家族の安否、その子供達の避難をどうするか。混乱する状況下で、避難支援者は判断に揺らぎます。避難を支援すべき人たちが、彼らの家族の避難を優先する事態も多発するでしょう。その人たちに、行政は、避難支援の要請をできるか。そのための法的整備は成されているか。その方達への被害補償が規定されているか。はなはだ疑問です。

地震による原子力発電所の放射能放出事故では、通信手段が奪われ、被災地に人がいなくなり、道路事情の確認、放射能濃度の確認もできません。被災地の外からの避難支援、物資の支援は、支援者の保護を巡って、会社からの強い規制も入ります。放射能放出さえなければ、多くの人的支援が可能で、全国から支援者が集まるでしょう。原子力発電所事故による被災は、そうはいきません。

加えて、現行の避難訓練は、一部の人達の「動員」で実施されています。避難支援者の確保もスムーズです。道路もスムーズに移動でき、道路や橋の崩壊はありません。降雪時には実施しませんし、海が荒れれば、船は出しません。避難訓練に参加する人たちに厳しい表情は見られず、どこかのんびりしていま

す。「安全神話」の上に成り立つ避難訓練です。これを避難訓練と言えるのでしょうか。まさに「再稼働のため」の避難訓練にすぎないではありませんか。

実際の事故で、たとえ避難できたとして、その先はどうなるのか。私の連れ合いは、「私は逃げない」と宣言しています。避難先の体育館で、トイレはどのようなのか。福島原発事故避難に際し、トイレの状況が報道されたことはありません。「誰もが見たくない状況」を想像できます。避難先のざわめきの中で、不眠を強いられ、「そこで病気になって死んでしまう」と言います。

私の連れ合いは、心臓の難病を抱えています。毎日たくさんの薬を服用し、血圧を測り、体重を記録しています。放射能放出事故で地域が混乱すれば、薬を確保することができず、生を終えることとなります。「自宅待機」。その判断も、連れ合いの命を奪うことになるでしょう。

我が家には老犬がいます。「とても置いていけない」と言います。そうすると私も避難できなくなります。60歳を超え、それぞれの事情を抱えながら、懸命に生きている私たちには、「避難しても無駄だ」と思わざるを得ない、福島原発事故避難者の現状があります。

生まれた土地で、静かに暮らしたいと願う、私たちのささやかな希望が、「無責任」な原子力発電所の再稼働により、失われようとしています。余生10数年。繰り返される四季の変化を、「あと何回」と指折りし、とても愛（いと）おしく感じるようになりました。季節の移り変わりを、体に刻むように生きていきたいと願う、私の強い思い。

原子力規制委員会の人たちは、これらのことをどのように判断し、再稼働を認めたのでしょうか。「規制委員会の権限外」事項であると答えるのでしょうか。私たちは今福島原発事故再来に向けて、ひた走っていると云わざるを得ません。

以 上